

棚尾地区まちづくり事業  
平成 26 年 7 月 24 日（木）19 時～  
棚尾公民館 3 階

## 第 37 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など  
八柱神社の奉納品、水害の記録と排水路など

2 テーマ 62 「棚尾の農業」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 連絡事項・情報交換など

4 次回日程

第 38 回 8 月 21 日（木曜日）午後 7 時から「安専寺と安藤圓秀」

第 39 回 9 月 25 日（木曜日）午後 7 時から「達吉の歌碑」

## 「棚尾の農業」

### 1 要旨

港本町の J A あいち中央・碧南営農センターに、棚尾本町の斎藤甚四郎氏と弥生町の杉浦吉治郎氏の顕彰碑が建っている。戦前から戦後にかけて、棚尾農協の創設など農業振興に貢献された先駆者である。

矢作川河口部の農地は肥沃な砂質地が広がり、優良な畑作地帯である。栽培される作物も江戸時代は綿花が植えられていたが、明治以降は、早堀り甘藷、落花生、三寸ニンジンなどに変遷している。現在は特産の冬ニンジン「へきなん美人」を始めタマネギ、トマト、花卉などの栽培が盛んで、農業専従者も多いのが特徴である。

### 2 棚尾の農業の特色

昔の棚尾の農業は、他地区農地での出作と農業とその他の収入で生計を立てている人が多いのが特色である。そして江戸時代後半から明治にかけて、まれにみる人口の多い村であった。

大浜地区歩いて暮らせる街づくり推進委員会が平成 19 年に発行した「碧南市大浜地区の歴史と暮らし」によると次のとおりである。

#### 「人口の増加」

村の経済活動の発展は、人口の増減に端的に表れる。そこで、大浜陣屋領になって以後の人口の推移を見てみよう。

棚尾村の場合は、支配下に入る以前の天明 2 年（1782）は 997 人であったのが、天保 12 年（1841）には 4,733 人と実に 4.75 倍となり、明治 2 年（1869）で、5,790 人と 5.8 倍となっている。この特異な人口増の内容を検討して、その背景を探ってみよう。

この人口が、特別でいかに大きな数字であったことを理解するために、明治 29 年（1896）の時点で、城下町であった刈谷町の人口は 2,676 人、又、東海道の宿場町であった知立町は 3,531 人であったことをあげておきたい。

棚尾村の明治 9 年（1876）の職業別調書（「碧南市史」第一巻）によれば、総計 1,171 戸の内、農業 917 戸（78%）、商業 103 戸（9%）、工業 99 戸（9%）、雑業 25 戸（2%）、兼業 22 戸（2%）とある。

商工業は18%もあり、この数字からだけでも、棚尾村の人口増が諸産業の発達によることを示している。しかし農家が78%もあり、数字からはまだまだ農業が主の村に見える。しかし、この人々は本当に農業だけで生計を立てていたのでしょうか。というのは、幕末の明治2年の1,177戸の内「本百姓」は485戸だけで、過半の692戸は、土地をもたない「水呑百姓」であるからである。

こうした水呑百姓が、どのように生計を立てたかがうかがえる記事が、安政5年(1858)2月に棚尾村が助郷免除を嘆願した文書にある。ここには、「当村の儀は、人家多く御田地払底に付き、隣村并に御他領へ出作仕り、農業の間漁獵浜稼ぎ等にて渡世仕り」とある。ここから「水呑層」の生計は、村内の小作だけでなく、他村への出作と漁獵と浜稼ぎであったことがわかる。浜稼ぎとは塩浜稼ぎや浜の運搬などの賃労働であろう。また、ここには書かれていないが、この地域は「三河木綿」の本場で、女性たちは、木綿の糸繰りと機織りで、生計を立てていた史料もあり女性も十分に支えていたのである。

つまり、棚尾村の急激な人口増は、①商工業の発展 ②他村への出作 ③漁業 ④湊、浜での賃稼ぎ ⑤女性の木綿稼ぎ を背景としているのである。それは水呑百姓が小作だけでなく、こうした賃労働によって収入を得る多様な場が、大浜陣屋時代に、この地域に形成されていたことを示している。

棚尾村の出作で大きな意味をもつのは、前浜新田の開発である。(以下省略)

### 3 棚尾農業の沿革

西 暦	和 暦	出 来 事
1871	明治4年	前浜新田で落花生の栽培が始まる
1896	明治29年	棚尾村農会(農談会)設立
1906	明治39年	平和用水通水
1912	明治45年	有限責任碧南甘藷落花生販売購買組合設立
1925	大正14年	大浜町に三碧青果市場開設
1943	昭和18年	農業団体法により農会、産業組合等は農業会に統合
1947	昭和22年	農業協同組合法が公布される
1948	昭和23年	棚尾農業会解散 6月10日 棚尾町農業協同組合設立

		(市内では他に新川町、大浜町、鷺塚、神有、碧南市日進、碧南前浜、旭の8農協で発足)
1949	昭和24年	天王農業協同組合設立
1951	昭和26年	第1回農業祭開催
1955	昭和30年	西端農業協同組合が碧南市へ編入
1960	昭和35年	碧南市全体では戦後最大の耕地面積となる
1970	昭和45年	米の生産調整(転作・休耕)始まる
1972	昭和47年	3月28日 碧南市内10農協解散し、碧南市農業協同組合設立
1973	昭和48年	3月31日 碧南市開拓農協が解散し碧南市農協に合併
1975	昭和50年	棚尾支所集出荷場兼肥料倉庫、甘藷キュアリング倉庫完成
1977	昭和52年	農協主催第1回農業まつり開催
〃	〃	3月12日 農協会館竣工、鉄筋3階建て
1981	昭和56年	棚尾支所から棚尾支店へ名称変更
1982	昭和57年	3月 棚尾支店事務所完成 11月 棚尾支店集出荷場増設
1983	昭和58年	9月 衣浦総合卸売市場開場
1996	平成8年	4月 あいち中央農業協同組合発足
		斎藤甚四郎氏、杉浦吉治郎氏顕彰碑、棚尾本町から営農センターへ移転。跡地はふれあい館駐車場となる
2007	平成19年	3月 大浜支店、棚尾支店、前浜支店が統合し、碧南みなみ支店となる

#### 4 三つの農業顕彰碑

##### (1) 斎藤甚四郎翁之像

港本町のJAあいち中央・碧南営農センター内の緑地内に斎藤甚四郎氏(以下敬称は略す)の青銅製の胸像と石造の由緒碑が建っている。

(由緒碑表面) 碑文は縦書きであるが、以下全て横書きで表示する。

斎藤甚四郎翁は父甚六の二男として明治二十三年二月七日碧海郡棚尾村字中道四

十九番地に生れ家業に従事せし処其の優れた識見と誠実温厚な人柄は若冠にして郷党の信望を集め碧南甘藷落花生販売組合の監事を降出しに引続いて同組合、農業会、農業協同組合の夫々長を歴任し併せて愛知県園芸農業協同組合連合会理事、碧南市園芸農業協同組合連合会長と専ら農業振興指導に従事すること実に四十有余年 不屈な実行力と温厚篤実を以て克く農民を導いて園芸事業並に農業団体育成に貢献せられた其の功績は洵に深厚偉大なるものがある就中特産早出し甘しょ三寸人参の育成販売に関しては終始一貫我が身を顧りみず精魂を傾注し東奔西走して幾多の曲折に遭遇するも決して倦むことなく遂に全国屈指の大園芸地帯を造成し以て農家の経済を向上せしめたるは之れ実に翁が永年に亘る努力の賜に依るものである

かかる翁の業績に依り農聖山崎延吉先生頌徳会より農業振興功労者として農民の最も栄誉とする山崎賞を昭和三十三年七月十九日に受けられ此の慶びを契機に同志相謀り広く各位の御賛同を得て胸像を建立し翁の遺徳を千古不変に頌えんとするものである

昭和三十四年一月

斎藤甚四郎翁頌徳会

愛知県知事桑原幹根書

(裏面)

設計並胸像製作者 日展所属 加藤潮光

石匠 中畑 中村石材

又、胸像の裏面は次のとおりである。

・協賛者 右に読む

関東

東京中央青果 // 築地 // 東印東京 // 東京丸一 //

// 江東 // // 荏原 // // 豊島 // // 新宿 //

// 千住 // // 多摩 // 横浜丸中 // 浜印金港 //

川崎中央 //

関西

大果大阪青果 関西 // 大阪中央 // 大阪聯合 //

京果京都 // 京都 // 兪丸京 // 神果神戸 //

神戸協同 // 尼崎中央 // 姫路農産市場 南大果

南大阪青果 名古屋	山亀 〃	西協同 〃	
名古屋名果	〃 丸一	〃 大一	〃 名青
名古屋丸名 北陸	〃 丸協		
青果	他三社		

・賛助委員

長田峯義、 高橋市十 永坂鶴松 石川専一 石川常吉 生田伊三郎	斎藤忠夫、 長田文七 石川吉五郎 井上計治 石川石松 生田義次	永坂米松、 古久根伴 小沢留吉 鈴木庄一 生田千松 三島清一	生田勝平、 古久根正義 杉浦唯枝 斎藤良太郎 石川伊市 永坂定一	永坂専一、 名倉半太郎 榊原榮太郎 永坂又造 生田秋太郎 加藤弥蔵
--	--	---	---	--

・実行委員

生田幸雄 永坂傳一 井上種吉 他協賛者七五八名	小高德一 石川清松 斎藤孝一	永坂光義 小沢宇三郎 小笠原憲太郎	金原米作 小笠原徳一 小笠原妙次郎	鈴木嘉三郎 永井徳松 生田睦
----------------------------------	----------------------	-------------------------	-------------------------	----------------------

・発起人

愛知県知事 桑原幹根 県農林部長 山分一郎 県会議員 杉浦喜市 県中央会長 森八三一 県大阪 〃 深谷一三 市園連会長 石川正平 日進組合長 加藤巖 新川 〃 加藤義信 鷺塚 〃 杉浦清市 天王 〃 神谷弥吉 市園連 角谷實	県園連会長 鈴置理樹雄 県農務課長 魚住丈衛 碧南市長 中村庄太郎 県東京販所長 斎藤清水 郡組合長会長 岡部喜久雄 市組合長会長 杉浦義雄 前浜 〃 杉浦鶴松 神有 〃 林口恒蔵 旭 〃 池田秀吉 東端 〃 磯村孫一 小笠原重松
--	---

・協賛

県信用連会長 舟橋磯右衛門      県販購連   〃   石垣徳重  
県厚生連   〃   木下信                      県共済連   〃   岩瀬和希

以上順序不同

・製作者 加藤潮光

## (2) 杉浦吉治郎氏之像

上記と同じ場所に杉浦吉治郎の青銅製レリーフがはめ込まれた石碑があり、裏面に次のとおり由緒が記されている。

杉浦吉治郎氏は明治二十八年二月七日父梅吉の長男として生れ大正五年碧南甘藷落花生販売組合の書記を振出し以来三十有余年其の間専務理事又は組合長として我が身を顧みず率先垂範実行力を以て其の業に当り温情と度量と技能によりよく組合員を導き卓越せる手腕と挺身的活動を以て組合員経済の向上に努められた

其の功績は洵に偉大なるものがあります因って私達は氏の碑を建立し偉業を偲び其の徳を頌え永く後世に伝えんとするものである

享年昭和二十三年四月三十日 五十三才

昭和三十四年一月

棚尾町農業協同組合員一同

いたち会員一同

愛知県知事桑原幹根書

## (3) 甘藷販路開拓者榊原梅吉翁之碑

権田町二丁目に甘藷販路開拓者榊原梅吉の顕彰碑が建っている。大小2基一組の石碑で、碑文は次のとおりである。

ア 主碑

(表面)

甘藷販路開拓者

榊原梅吉翁之碑

野瀬義道書 印

(裏面)

賛助員 イロハ順

石橋喜六

石川未吉

石橋熊吉

岩戸市松

伊藤三之助

板谷仙太郎	板谷藤治郎	新美惣右エ門	外川七太郎	利根竹之助
太田秋治郎	加藤安太郎	粕谷弥曾松	河合源六	河合喜三郎
吉田嘉次郎	棚勝	棚力	都築清一	辻覚三郎
辻留吉	筒木英待	永坂常次郎	中村九良三郎	中村常治郎
藤井喜次郎	藤井万五郎	天野圭治郎	天野善治郎	天野玉次郎
荒木信太郎	榊原吉治郎	榊原安太郎	榊原梅太郎	斎藤録甚
金原定四郎	三嶋作雄	小澤實太郎	小久保要次郎	小久保寅吉
小久保利八	樋口金治郎	鈴木関太郎	鈴木春吉	鈴木信治郎
永坂兼治郎	鈴木作次郎	杉山與兵エ	杉浦弥曾八	杉浦倉吉
鈴木豊松	鈴木春吉	斎藤源待	長田文治郎	永坂梅吉
佐藤九右エ門	横井弥七	石川牛太郎	杉本利八	斎藤栄之助
榊原七太郎				

發起人

石田三代助	石川吉治郎	生田幸助	高松和治郎	斎藤甚四郎
杉浦吉治郎	杉浦三津太郎	鈴木繁右エ門		

岡崎市 石工 中川和七

昭和四年五月

イ 副碑

(表面)

一心制○端○正

○言行相副

為榊原翁甘藷販路開拓記念 智見○

(裏面) 右へ読む

伊勢津	天春源次郎	全	津青物商会	四日市	⊕青物市場
全	⊕青物市場	富田	⊖青物市場	全	大與商店
桑名	⊖味又賣場	四日市	渡辺祐太郎	前浜	杉浦太七
福江	樋口勝平	棚尾	角吉	前浜	鈴木繁松
篠島	小久保留吉	平七	岩間佐太郎	棚尾	大弥
岡崎	中川和七	飯田竹三郎	杉山金五郎		
勲八等	男 榊原福太郎				
平坂	石匠 中村泰三	刻			



5 有限責任碧南甘藷落花生販売購買組合設立

明治 33 年産業組合法が制定され、碧海郡でも郡農会が主となって産業組合の設立を奨励した。その内の一つが有限責任碧南甘藷落花生販売購買組合である。

事務所 旭村大字前浜新田字葎生 45 番地

組合長 高松和治郎

設立許可年月日 明治 45 年 6 月 27 日

組合員数 627 人

取扱い品目 甘藷、落花生

6 歴代棚尾農協組合長、支店長など名簿

年の判明しないものは空欄とした。

役 職 名	年又は年度	氏 名
会長	昭和 18 年～	杉浦吉治郎
〃	〃 ～23 年	斎藤甚四郎
組合長	〃 23 年～33 年	斎藤甚四郎
〃	〃 34 年～37 年	鈴木吉太郎
〃	〃 38 年～40 年	鈴木嘉三郎
〃	〃 41 年	小高德一
〃	〃 42 年～46 年	小澤宇三郎
棚尾支所長	〃 47 年	斎藤昶一
〃	〃 48 年～50 年	松原修
〃		鈴木師
棚尾支店長		金田芳明
〃		杉浦幸雄
〃		岩月初男
〃		清水一夫
〃		杉浦三衛
〃	平成 7 年～10 年	榊原好光
〃	〃 11 年～14 年	小笠原巧
〃	〃 15 年～17 年	杉浦朗

〃	〃 18 年	岡田隆雅
碧南みなみ支店長	〃 19 年	榊原好光
〃	〃 21 年～22 年	岡田隆雅
〃	〃 23 年～25 年	岡部正弘
〃	平成 46 年～	岡田昌之

## 7 農産物の変遷

棚尾の農業の主流であった前浜新田など矢作川沿岸の新田について、農産物の変遷を辿ると次のとおりである。

出典：碧南市史第二巻 農産物の変遷

### (1) 綿花

明治三十年以前（綿が国内で自給自足されていた頃）には、わが大浜綿は全国第一位と言われた。綿は砂質の土壌でなければ好結果を収めがたい。この頃の状況をみると、下山、前浜、伏見屋、伏見屋外の各新田は共に全畑面積の 100%、棚尾と大浜上との間は 90%であった。耕作方法は、畑の麦作の中へ、八十八夜ごろ播種し、二百十日ごろから摘み取った。摘んだ綿を小型手挽きろくろで、綿実を脱して、繰り綿とした。さらにこれを綿弓ではじいて打ち綿とし、手紡車で綿糸とし、これを織って三河白木綿ができた。

しかし、明治 15 年（1882）ごろから綿作は漸減の一途をたどりつつあった。これはインド綿など安くて品質の良い輸入綿が入って来るようになったためである。

### (2) 早堀甘藷、落花生

大浜綿の栽培が衰えた頃、下山や前浜の綿畑は、甘藷と落花生の畑になった。7 月中に甘藷を早堀りして、10 月に落花生を収穫した。砂地と微量の塩分を含んだ土質がきわめて適していたため、両者の産額が多かった。収穫期になれば、サツマ芋の運搬船が蜷川を絶えず往復したという。

### (3) 甘藷落花生販売組合の状況

棚尾村役場にあった昭和 12 年の資料からその様子を抜粋する。

出荷事業計画書

#### 一 名称及事務所

名称：碧南甘藷落花生販売組合連合会

事務所：愛知県碧海郡棚尾町字中久根 50 番地

## 二 出荷事業経営の沿革

本会は碧海郡の南部に位置し耕地は海を埋立てたる新しき土地にして、米麦作を以って農業経営の主体となし、副業としては僅かに桑苗並びに木綿の栽培に過ぎざりしか。文久元年始めて甘藷の栽植をされたるなり。初栽せしは旭村大字前浜新田の金原茂十氏にして氏の多年研究苦心の結果、甘藷栽培上に多大の効果を来たしたり。現今行ふ甘藷苗床の作り方一カ年間に同一圃場より二面の作付収穫法等最も顕著なるものなり。

順次付近の農家之を習ひ、甘藷栽培の有利有望なるを知り、年々作付け面積を増加し、品種の改良肥培管理等に努力し来たり、此処に生産品の産額を増すや地方仲買商人の利益を壟断する事余りに多く、生産者農家の打撃を蒙る事多大となりたる。真に此の優良なる特産物を世に知らるる事無く、順次生産収益の減少するに鑑み、高松和治郎氏始めて生産物の統一を計り、個人販売の不利なるを知り共同販売の有利なるを説き、明治三十五年村内栽培者と相計り前浜甘藷落花生販売組合と称する組合を組織し共同販売をなすに至れり。

然れ共、当時に在りては組合員の商的取引行為の幼稚なりし為、予期の成績を挙ぐる能はず。明治四十四年旭村農会、棚尾村農会、大浜町農会の各関係農会に依頼協定し、事業の拡張発展統一を計る可く三カ町村連合農会を組織し、之が販売斡旋の事業を助長せられたり。其の後、需要地市場問屋の調査、消費状況の調査、先進地の視察等を年々行ひ販売方法の改善と同時に生産品の品評会講評会等を開催し、品質の向上生産品の統一に努力し、産地に於ける商人仲買人等の手を経ずして、直接東西各地の大市場へ輸送し、以って生産品を有利に販売し来れり。

猶、落花生の栽培に関しては、明治初年頃相当多く米国と直接契約し出荷したる事在りしも、近年支那産のものに圧迫せられ栽培不利の為年々減少したり、依って之が取扱いは、数年前より中止致したり。而るに甘藷の後作として三寸人参の栽培有利なる故、之が栽培を奨励し年々其の栽培は倍加するに至れり。

甘藷、三寸人参の栽培地域は旭村、棚尾町、大浜町、幡豆郡平坂町の四カ町村なるに依り、昭和五年販売組織を変更し幡豆郡平坂町を加へ関係町村農会援助の下に本連合会を設立せり。

本作物は米麦作に次ぐ主要作物にして、殊に当地方の如き埋立て新田に於ける作物として唯一のものなり。之が販売処分方法の巧拙及価格の高低は農家経済に及ぼす影響重大なり。

依って本会は諸般の現状に鑑み、品種の改良栽培法の統一を計り優良品の増産を奨励し、販路の拡張販売制統強化に努力するものなり。

県及び県郡市農会並びに関係諸団体の本会事業に対し一段の援助を願ふものなり。

### 三 出荷品目

甘藷、三寸人参、葱

### 四 現在所属団体別員数

団体名	所在地	組合員数	組合長名	備考
旭支部	旭村前浜新田	156 人	高松和治郎	
棚尾支部	棚尾町字中久根	316 人	杉浦吉治郎	
大浜支部	大浜町字四ツ山	234 人	石川吉治郎	
平坂支部	平坂町字奥田新田	53 人	神谷春吉	
計		795 人		

以下省略

### (4) 麦、菜種

麦は畑の冬作及び田の裏作として栽培された。特に他地方ではあまり見られない本麦田（本畝田）が掘られた。前浜新田の場合は塩抜きの目的もあったが、きわめて重労働であった。

菜種も田の裏作として植えられ、麦と競合していた。昭和初期頃まで新田では、菜種が過半数を占めたが、戦時中食糧増産のため麦作が主になった。

## 8 現在の特産農産物

碧南事典から抜粋

### (1) 特産野菜

この沖積砂壤土の畑作地帯に露地栽培されている主な作物は、輪作体系をとっているニンジン、タマネギ、早堀かんしょで、それぞれ県下有数の産地となっている。

早堀かんしょは明治時代より盛んに栽培され、明治 45 年（1912）には碧南甘藷落花生組合が組織され、大正年代には他の地域に先がけて 7 月から 8 月にかけての早期出荷を可能にして、高値で取引された。第二次世界大戦の頃は普通作で多収穫品種とな

ったが、今日では再び早期出荷できる高系十四号、さらに土佐紅に変わった。平成元年は170haで県下の栽培面積をもち、生産量約2,010トン、生産額約2億9千万円をあげている。関東、東北、北海道方面への出荷が多い。

## (2) ニンジン

### ア 碧南ニンジンの日

冬ニンジンが大正5年(1916)から作られ、昭和7年(1932年)に「碧南五寸人参」と命名され、国の特産地に指定された。平成16年(2004年)「へきなん美人」のブランド名を付ける。平成20年(2008年)に「いい人参」の語呂合わせで、1月23日を碧南ニンジンの日と決め、同年10月、日本記念日協会に登録。

### イ 碧南ニンジンの歴史

出典：WAO! No.68 2013年

碧南ニンジン栽培の歴史は古く、大正時代には甘藷出荷組合により共同出荷が始まっていました。その作付け面積が大幅に増加したのは、海岸付近の土地改良整備が始まったころです。新しい土の特性をみながら、土に合う品種の模索が始まりました。

当時の品種は「碧南三寸人参」で、現在の「五寸人参」より一回小さく、東京を中心とした関東市場に貨車で出荷されていました。そのため、現在は廃駅となっている玉津浦駅、棚尾駅、三河旭駅など輸送に便利な駅の近くに農協がありました。当時の資料によると碧南のニンジンは、工場や学校給食など大口需要向けの出荷が主流で、価格も他の産地に比べ低かったようです。順調に出荷が進む中、碧南ニンジン存在を揺るがす出来事が起きました。画一化された商品を取り扱う大型店では取り扱いにくいとの理由で、青首が混入したニンジンは消費価格が下がったのです。

このような状況から抜け出すために、農協、農家が一体となり品種や規格、栽培技術等について検討が繰り返されました。栽培講習会を開き、土寄せをして青首をなくすなど、農家の人たちの多くの努力が費やされました。

昭和50年ごろには、新型の人参洗い機を導入し、品質向上に努めました。また、数年後には再度、大型の新しい人参洗い機が登場しました。青首がでない栽培技術の普及、新型の人参洗い機、主力品種として「碧南鮮紅(せんこう)」の開発など産地強化の努力が続けられ、その名声は徐々に高まっていきました。その後も、産地間競争を戦い抜くため、日本一の産地を目指して、先人たちの努力が続きました。

平成に入ると野菜の流通は大きく変わり、従来の八百屋より大手スーパーなど大型の量販店が重要な地位を占めるようになりました。店頭販売も3本や5本での袋詰めが主流になり、長さが揃ったニンジンが好まれるようになりました。

その影響で長年栽培してきた愛知県の伝統野菜である「碧南鮮紅5寸」では、長さが不揃いで袋詰めしにくいとの意見が強くなってきました。そうした状況を踏まえ、前浜町の篤農家（研究心に富んだ農業家）と種苗メーカーを中心に農協が協力して、新たにニンジンF1品種「へきなん美人」が誕生しました。その後、碧南人参部会（旧碧南露地野菜協議会）を中心に碧南市の協力をえて、ブランド「へきなん美人」としてPR活動が進められ、現在では、中京、北陸地域で高い評価を受けています。

#### ウ 冬ニンジンがおいしい秘密

冬ニンジンのほとんどは、碧南市南部、海に近い砂地の畑で作られています。畑は足が沈むようなさらさらとした砂地。この砂地の柔らかさこそおいしさを作る秘訣なのです。冬ニンジンは、夏に種をまくと秋から冬にかけて肥大・着色し、11月～翌年3月にかけて収穫期を迎えます。

ニンジン本来の生態に最も適した環境で、じっくりと時間をかけて成長します。一般的に春夏ニンジンと大きく違うのは畑の風景です。寒さによって地上部の葉は茶色く枯れてしまいましたが、土中のニンジンは枯れずにゆっくり育っています。

### (3) タマネギ

#### 碧南事典から抜粋

タマネギ栽培は、ニンジン及び早掘かんしょの輪作体系に入ってから急速に増加した。以前は早掘かんしょの間作として麦作が多く行われていた。これはかんしょをさした時の風除けの意味があったが、収益面から麦の代わりに昭和35年ころからタマネギが栽培されるようになった。昭和45年に指定産地となった碧南では白玉が栽培されている。平成元年には816戸の農家で220haに栽培し、約1万3,400トン、約9億4千万円の生産をあげている。出荷時期は4月中旬から6月下旬までである。地元中京圏の外に関東、東北、北海道、北陸へ出荷している。

## 9 お聞きした農業に関する話

### (1) グタかき

昔は肥料が容易に入らなかったため、海草などの混じった浜泥、イギスの入った泥

をべか舟に乗せて肥料として畑に入れた。グタには小魚が混じっていたこともあり、食べるのも楽しみだった。

(2) ペナント号の自転車運搬

自動車の普及していない時代は、岡崎、刈谷、蒲郡などの市場へは、補助ホーク付きの「重量運搬車」という特殊の自転車で運んだ。棚尾の高橋自転車製でペナント号と呼ばれていた。

(3) 貨車で出荷

三河線の貨車で出荷するため、駅へは大八車やリヤカーで人参や甘藷を持ってきて、みんなで俵や木箱に詰めた。木箱作りのアルバイトをしたこともある

(4) 遠い農地は泊まりがけ

西尾側の遠くの田や畑の場合、自動車がなかった頃は、往復に時間がかかるので、忙しい季節は小屋に泊まりがけで作業をした。